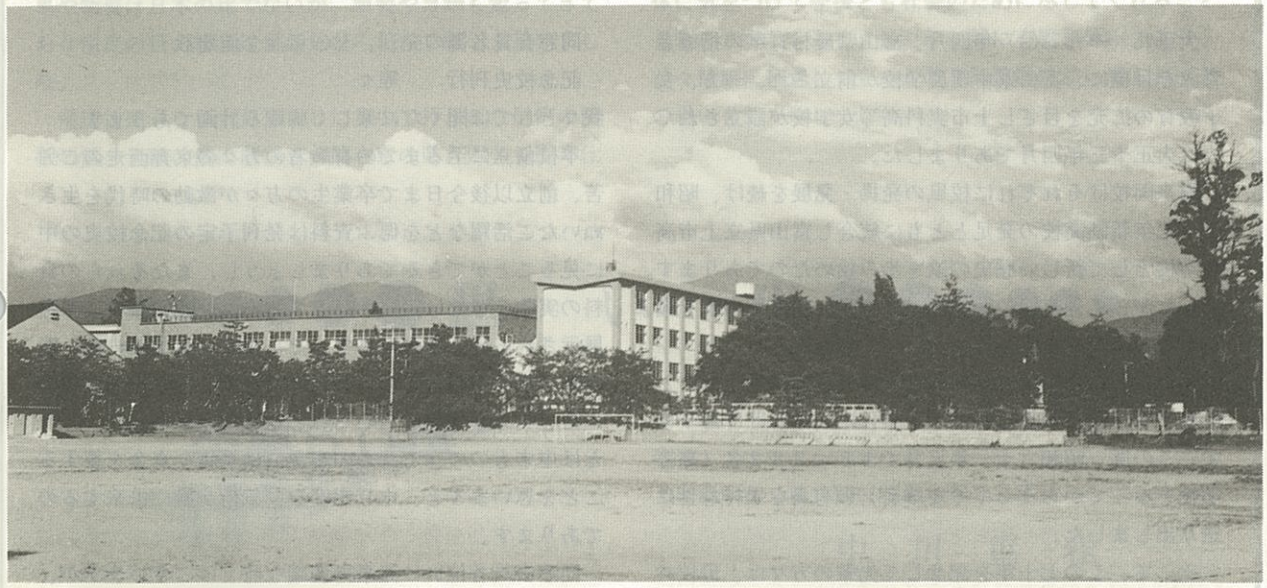
1986

同窓会会報

第34号

富山県立上市高等学校



母校発展に御協力を

同窓会長　藤原平蔵

我等の母校上市高等学校は、大正九年に中新農学校として設立され、以来発展の一途を辿り、昭和六十四年に創立七十年を迎えんとしています。

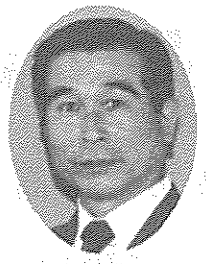
勤労、自治、向上の語をしるべとして友情で結ばれた卒業生は、一万六千有余名を数え、各々の職域に、鋭意・精進・活躍されて居られることは、何よりの喜びであります。

この度の教育審議会は急激な社会の変化、文化の発展に対応し、教育の実現を図るための教育改革も、第二次答申が出されました。

高見校長先生も着任以来、武道館、運動場の拡張整備つゞいて、二十一世記に対応できる特色もつ上市高等学校の実現に研究努力されつゝあることは周知のとおりで感謝しています。

同窓会も近く古稀の七十年を迎えるにあたり、吾等の育った母校に、時代が要望する記念会館の建設を計画し在校生の教育研修場に、卒業生の生涯学習のふれ合いの場にと、研究審議の結果決定しました。

上市高等学校同窓会員の皆様、母校の発展に寄与するため、心からなる御協力、御援助を賜りたいと存じます。



近く創立七十年を迎う

学校長　高見　貢

大正九（一九二〇）年四月、富山県農村青年の指導者育成を目標に、富山県中新農学校が創立され、一方、女子教育の拡充を目ざし上市実科高等女学校が設立されたのは大正十三年四月でありました。

爾来両校はそれぞれに校風の発揚・発展を続け、昭和二十三年新制高校の発足とともに統合し富山県立上市高等学校として新しい歴史の道を歩み始めたのであります。

したがって、本校の歴史は遠く大正九年にその源を発することになります。

来たる昭和六十四（一九八九）年三月で満六十九才となり、同年四月からは創立七十年目に入るわけであります。この間、昭和六十一年三月で１５，７８２名（高等学校となってから１２，０１３名）の有為な人材を世に送り出しました。

そこで、この七十年を記念して先輩の方々は、母校の古稀を祝い記念事業を行なおうと昨年以来毎月のように（時には月に数回も）会合され、このほど概要案がまとまったようであります。

同窓会員名簿の発刊、七〇年記念館建設
記念校史刊行　等々

我々としては聞くだに楽しく胸躍る計画であります。

本校創立に至るまでの有識者の方々の東奔西走のご労苦、創立以後今日まで卒業生の方々が激動の時代を生きぬいたご活躍などを偲ぶ資料は発刊予定の記念校史の中に見ることができるでありましょうし、またそれらの資料の実物の一部は完成されるであろう記念館の中に保存展示されることと思います。そしてこれら先輩の尊い遺産を日夜心の糧として、後輩は受けつぐべき上市高校の生命を実感し体得していくことだろうと思います。

とは申すものの、これらの事業には莫大な資金を要することを思いますと、申し訳けない気持が胸に去来するのであります。

同窓会員各位には諸事御多端な時ではございますが、何とぞ格別なご協力を賜りますよう、在校生、教職員を代表してお願い申し上げる次第であります。

雑感

東京支部事務局長
上市農学校　第９回（昭和７年３月卒）

酒井清一

同窓会流にいえば卒業五十五年組ということになりますが、いまは亡き級友島田信義君のたっての要望を断り切れず、東京支部の事務局を引受けてから十年になります。その島田君が他界して既に四年になりますが、優柔不断な私は他人に強く依頼する術もないまま何らなすところもなく未だに看板のみを掲げています。富山県下各高校の同窓会支部の諸行事などの記事が県人雑誌“富山と東京”や“富山県人”に賑々しく報道されているのを見るにつけても、早く適任の後継者をと心せかれています。

現在引受けている東京上市郷友会（上市町出身者や縁故者の親睦会）の会長にしても同様で、前会長が急逝されて後任の選考が難行したとき、折角先輩が残してくれたこの会を潰したくないから適任者が決まるまで暫定的にと引受けたが、その後も引受け手のない儘今年で四期目（一期二年）になります。

我ながら感心しているのは趣味と健康を考えて老後の暇潰しにもと始めた植木職の仕事で、作業に追われながら九年続いて健康はむろんのこと経済的にも幾分役立っているが、そろそろ高令者事業団へ鞍替えの時期かなあと思っています。

先般永年の念願が叶って第二の故郷ともいうべき旧満洲地区を旅したが、北京からハルピン、長春、瀋陽（奉天）、大連そして北京へと十日間を往時を偲びつつ或は

感激の涙を浮べ、または驚異の目を見張りながら駈け廻ってきました。都市の繁華街や旧満鉄の各駅舎などは四十年前と殆んど変ってなかったが、郊外地区は一変して近代化され、公園や高層ビルができ緑化が進んで明るくきれいになっており、鉄嶺以南の沿線にかなりの水田が造成されて日本の田園風景を見るようでした。
車や物資は日本の比でないが、服装や言語も変ってきており住民の目の輝きにも活気がみられて嬉しく思いました。

帰国後間もない六月三十日に宮中で行われた恒例の節折の儀・大祓の儀に前後三日間在京の県人四名で御奉仕しました。宮中三殿をはじめその周辺の清掃や式の準備、当日の御荷物運搬や後片付けなどの勤労奉仕で掌典職のお手伝であるが、大正生れの私達にとって宮中三殿を直接拝するさえ畏しこき限りであるのに、七月一日には陛下御自ら新宮殿の御車寄において私達四名に対し、態々御会釈を賜りました。そのお言葉の中に「くれぐれも身体に気をつけて今後とも社会のために尽してくれることを望みます」とありましたが、誠に有難き極みであり、益々健康に留意して生ある限り御聖慮に添い奉らねばとの思いを強く致しました。

●●●●●●思　い　出●●●●●●

卒業５０年

上市農学校　第14回（昭和12年３月卒）

中　川　重　春

早いものである。この８月17日上市高等学校同窓会の総会に、われわれ昭和12年３月卒業生に「卒業50年組の集い」の機会を設け、思い出を語らい旧交を深めるに誠に意義ある企てを与えていたゞき厚く感謝申しあげます。
その矢先き会報委員から何か感想めいたものを書くようにとの依頼があり筆をとりました。

入学から卒業まで３－５年間は、日本精神高揚の最高潮という時代であったようである。やさしく表現すればきびしい躾の教育であるかもしれないが中味は上級生と下級生とのけじめがきびしすぎる程きびしいものであったり、軍事教練の強化、軍国日本の先端であったのかもしれません。外にあっては銃を担いあるいは鍬をふるって食糧増産に無中の頃であったと思う。
当然学校でも農学校演習場として森林の治安、治水のため山林の植樹にも一段と力が入っていたと思う。場所については記憶がさだかでないが伐採と植樹に汗水流したのが昭和11年11月11日11時と11の連なりを昨日のようにはっきり覚えている。

かくして私達の50年は戦前、戦中、戦後と目まぐるしい世代で考え方も、世相も、多種、多様、復雑と言わざるをいません。私達年寄りから一言言はせていたゞくなら、今日ほど青少年や成人の意識や行動は自己中心の個人生活志向型が多く、社会のために奉仕しようとする社会生活志向型の人が少ない。人間の存在はかけがいのない個別的存在であり、同時にかゝわりあいのある社会的存在である事は明白である。

自由、権利を主張する個別的存在と責任、義務を果す社会的存在の両面を体得し、これからの社会の変化と文化の発展に自主的に対応できる自己啓発を重ね一層の行動、意識改革に努力しなければならない時であると思う。

本校10年勤続受賞者

早　水　信　行　先生

卒業４０年

〈時は流れて〉

上市農学校　第24回（昭和22年３月卒）

黒　崎　　保

井上誠治さんからの電話で「いろんな経緯から、あんた（黒崎）が会報に書くことになったので、よろしく」とのことであった。

正に晴天のヘキレキである。

私など、書く意志、まして能力など皆無であるのに…。

過去への郷愁というものは、過ぎ去った時間の長さと事象との距離の長さに比例するものの様である。そういう点からすると、私など、朝な夕なの散歩に母校の敷地を横切るからか、〝母校愛〟や〝同窓意識〟など喚起されないのは、むしろ自然ともいえようか。

さて、太平洋戦争勃発の翌年の入学、そして、農村や工場への学徒動員？極限下に近い物資不足の中に、不思議と精神だけは緊張と統一を保っていたような気がする。

無謀な戦争の中、実態を知らされず、たい戦勝のみを信じ込まされて通った学生生活、農作業や植林そして家畜の管理、飼育にあたった日々が、過にし青春の一ページとして、脳裡を去来する。田師、恩師のお顔やしぐさその信条を回顧し、又、先輩、後輩諸氏を想いつゝ、月日の経過の中に、小さな私の生きかつ過ごしかたを思うのである。

様本校長、沓先生、堀先生、白江先生、江野本先生、山渕先生などなど、枚挙にイトマもない諸先生、もう物故された方々……。

〝人は死すべき存在〟であるとはいえ、哀悼のきわみである。

ただ、藤田先生に時々、お逢いするのが何よりもの慰めではある。

先輩諸兄にも、多くの戦死者が出、私たちの中にも、少年兵への総志願の動きもあったが幸いにして終戦、まさに危機一髪であったこと等、戦時下の体験は、私たちの人生に大きく影響したことは否定しえぬ事実であろう。負戦直後の22年の卒業時の数々を想う。

人生八十年という。時々、友人、知人の訃報に接するに、人の一生を考えさせられるのも齢の故だろうか。

同心円的な成長の過程の中で、共に学び、共に語り、共に過した日々は遠くへ消え去ったが、多感な青春を真執に生きたことへの悔恨はない。人間は運命的な存在なのかもしれない。残り少ない人生を楽しく、有意義に過す中で、３年ないし５年の「上農時代」を想起するユトリと温い心情を持続したいものである。

同窓の諸氏よ。幸あれかし!!

卒業３０年

上市高校　第８回（昭和三十一年三月卒）

普通科　萩　中　久寿男

長い梅雨も明けて真夏のカンカン照り、暑い暑いと毎日交す言葉の時節に成りました。同窓会担当の先生より原稿依頼され、思いのまま書きます。早いもんですね。卒業して三十年と云われました。私は自営をやって居ますが、学生時代は一番楽しく思い出が沢山有ります。私の高校時代は学区制が有りました。

又、景気は上昇の真最中でも有り高校、大学を卒業していなくとも就職はひっぱりダコの様でも有りました。今は就職は大変な時代に成りました。学生時代の思い出は過去三十年間よりよけい思い出されるものが有ります。私は勉強の方はあんまり良く有りませんでしたが、マラソン県大会、高岡・富山を自転車で二往復した事も有り、又授業をサボって映画を見に行ったり、又先生とケンカ（意見交換）もやりました。でも、親には一回も学校へ出張してもらった事は有りませんでした。私も二人の男の子を持って、六年間ＰＴＡの御世話をして来ました。何事も無く、又これと云った事も出来ずに終ってしまいましたが、上市高校を愛する一人として又地元町民の一

人として上市高校の名を県下に鳴り渡らせる様な学校にしたいと思います。又幸いに現、高見校長は昭和三十五年に教師として着任され今回が二回目の着任、上市高校は昔とたいして変っていないなあとの事で第二体育館の建設、格技場、グランドの整備、又馬術部の問題を解決され、更に農業科にはバイオの問題やコンピュータとかまだまだやりたい事がいっぱい残っている学校であるとおっしゃっておられます。どうか同窓生会員の皆様、このチャンスに今一度上市高校をふりかえり見直していただきたいと思います。とりとめのない文許して下さい。

卒業２０年

上市高校　第19回（昭和42年３月卒）

農林工学科　**鍋　谷　正　成**

私達が入学した昭和三十九年は、国民待望のオリンピックが、アジア（東京）で初めて開催された年であった。あの時代は、開放経済が進み、貿易の自由化が漸次行なわれ、大国との対外競争に重点がおかれていた。まさに、高度成長時代の兆しが見えはじめた頃であった。私が在学していた頃は、ベビーブーム時代が反映し、一クラスの定員も五十名～五十五名のつめこみ教育であった。各課程も、普通科、農業科、畜産科、生活科、農林工学科、家政科、薬業科と多く、生徒数も一学年に四百三十名以上くらいはいた。当時は、農林工学科の実験室の新築と丸山農場の近代的畜舎の完成と第二農場の新築さらに中庭の緑化があり、施設設備が次第に充実されつつあった。なお当時は、誠実と行動力に溢れた清水美晴校長（現、上市町長）、温和で親しみある故藤枝盛松教頭の時代で、全校集会の時には、かならず清水校長は「積小為大」と何度も力説された。このことばが、今でも深く印象に残っている。

卒業二十年、想い出すのはなんといっても当時の恩師であり、クラスメートである。県内外で中堅幹部として活躍している同級生、家庭に入って主婦業に専念している彼女達は健在なのであろうか。この節目の年に、同窓会を通して二十年組の集いを開く計画が進められている。今、原稿を書きながら、卒業アルバムを開くと、高校時代の数々の青春の懐かしい一こまが想い出され、上高で力強く結ばれた友情の絆を確認し、その二十年間の空白をうめたいものである。

私は、現在、母校にて奉職しています。今、先輩や後輩（生徒）といっしょに、学び、物を考え、悩み、解決し、感動することが出来る自分を大切にしながら、今まで恩師から色々と指導をうけた事柄を今度は、私の出来る限り後輩（上高生）のひとりひとりに、その環境を直視させ、その中からどう生がいを見出すかを私も含めお互いに考え、それに向って努力してゆきたいものです。

最後に、母校と同窓会のますますの発展を祈りながら私の寄稿といたします。

卒業１０年

上市高校　第二十九回（昭和52年３月卒）

普通科　**荒　木　千代枝**

先日、同窓会の担当の先生から電話をいただきました。それで、卒業してはや十年が過ぎようとしていることを知り、とまどいの中に、もうあまり顔も合わせなくなったなつかしい人たちを思い返しています。

私の高校生の頃の記憶といえば、冬の雄々しい剣岳を仰ぎながら登校したこと、春の満開の桜並木、ひんやりとした図書室で友だちと小声で語らったことなどがうかび上がってきます。またお世話になった先生方のこと、時には冗談すらもノートにとっていたことも思い出されます。

近頃やっと、高校生や大学生の頃には想像もしなかった働くことのたいへんさやおもしろみがわかりかけてきたように思います。また、困難だなと思うことでも、始めの一歩を踏み出したら案外つまずきながらも歩み続け

ていけるものかもしれないな、などと感じたりもしています。高校卒業後十年目の今年の夏、なつかしい人たちにお会いしてたくさん刺激を受けたいと願っています。

終わりに、卒業十年組のお世話を頂いた方々へ感謝しますと共に、上市高等学校並びに同窓会の御発展を心からお祈りいたします。

上市高等女学校　第19回（昭和20年３月卒）

岩田栄子

婦人部の集い

六月のはじめ頃、町中の方へ買物に出かけた折、一見上品な老婦人といった感じの方が、「先だってはご苦労さまでした。」とにこやかに挨拶をされました。「はて、確かに最近お目にかかっているはずのお方だけど。」とすぐには思い出せず、挨拶を返して後ろ姿を見送っているうちに、五月二十五日に、つるぎ荘で行なわれた婦人部の集いに参加しておられた方だと気付きました。婦人部の集いも今年で十二回目。回を重ねる毎に先輩、後輩の方ともお互いに顔見知りになり、お話ができる機会も増えて集いの輪が広がりつゝあるのを感じます。

当日は、藤原同窓会長をはじめ、山本名誉会長、高見学校長、富樫先生、鍋谷先生に来賓としてご出席いただき九十名近くの部員の方の参加によって盛大に行なわれました。

午前は、山本名誉会長の講話、上市高等学校創立七十周年記念事業についての協議等が主となり、午後の懇親会では、部員の方による大正琴の演奏、民謡おどり、歌などを鑑賞させていただき、心豊かな一時を過ごしました。また、それぞれのグループでは、健康法や料理のこと、子育ての悩み、趣味のこと、学生時代の思い出などに話が弾み、和やかな雰囲気の中に婦人部の集いが終わりました。

陰の力となって私共婦人部の集いを支えて下さいました同窓会関係の方々、先生方に心から感謝申し上げます。

婦人部の集いは、来年も五月下旬の予定でございます。お友だちや、若い部員の方たちにも声を掛け合ってくださいまして、集いの輪がまた一回り大きく広がりますように。

本校は、間もなく創校70年をむかえますが、同窓会として記念誌を発行する予定でおります。

旧制農林学校、高等女学校を含め、新制高校（特に昭和23～32年ごろ）の資料が不足いたしております。旧制の校友会誌・同窓会誌・上高新聞（１号－３号）、その他バッチ、使用された教科書、教材、何でもよろしいですから、ご一報いただければ幸いです。後日お返し致しますのでよろしくお願い申し上げます。

上市高等学校内「同窓会」
冨樫勇夫（自宅☎７２－００３３）